

東北チベット（アムド）における社会主義

（伊奈学園総合高校教諭） 阿部 治平

ラブラン寺領概念図

（甘南藏族自治州を中心とした）



はじめに

清末以来カム（今日のチベット自治区昌都地区、四川省西部と雲南省北部）には、北京政府に対するダライラマ十三世（ラサ政権）の独立政策によって、何回かのチベット人の反清、反漢の軍事行動があり、四川総督がカムバ（カムの人）に殺されたりした。武力衝突のたびに大殺戮で報いたのは中国人（漢民族）である。清末以来カムを支配した四川軍の趙爾豊はあまりにも多くの僧侶と人民を殺したから「人ごろしの趙」とよばれた。

アムド（今日の青海省と四川阿壩藏族自治州、甘肅省甘南藏族自治州。ここに住むものをアムドパないしはタングートという）ではチベット人の主な敵は漢民族ではなかった。漢民族には好ましからざる感情を持っていたとはいえ、アムドを軍事制圧した青海回民族軍閥馬一族こそ最大の敵対者であった。

回民族軍閥の馬麒、馬步芳（馬麒の子）軍はラサ政府の派遣軍やチベット人士司の軍を打ち破っただけではなく、アムド全域を制圧する過程で、チベット・モンゴル両民族の心のよりどころであ

る仏教寺院を容赦なく破壊した。このため、チベット回両民族は民衆レベルでも互いに殺しあった。話しの舞台である甘肅省甘南藏族自治州ではカムほど深刻な漢・チベットの対立はなかった。以下にみるように国民党政府はどちらかといえばチベット民族およびラブラン寺の側にたって西寧の馬軍閥との間を仲介した。

今日、この地域に広く存在する反漢感情は、現代にいたって醸成されたものといえる。それは第1に中国共産党による革命のやりかた、第2は大躍進政策、第3はプロレタリア文化大革命、そして日常的な行政においてチベット人が従属状態におかれていることに由来する。ここでは社会主義体制が完成する農牧業の集団化すなわち人民公社までを概観する。

1 青海軍閥馬一族とのたたかい

1911年、「辛亥革命」がおこり清朝は倒される。ラブラン寺の領域は国民政府のもとでは甘肅省青海西寧府循化庁の管轄下に入れられた。もともとのザンチの地名は忘れられ、チベット人はラブランと呼び、漢語では夏河と呼ばれるようになる。

寺領は、依然として他の国民政府の行政組織からは独立しており、ほぼ自治を実現していた。

（この節はおもに『甘南藏族自治州概況』『夏河県党史資料』第一集による）

1916年ラブラン寺では寺主ジャムヤン四世が逝去し、空位のあいだ、摂政職のアモンツェン化身が寺の管理をすることとなった。ところがこれを不満に思った最高位の官位にあった李宗哲（漢語名、チベット名不明）は自分の地位を維持しようとして、河南親王や西寧の「寧海鎮守使」馬麒にさまざまなはたらきかけをおこなったから、僧侶のあいだに彼に対する不満がうまれた。僧衆代表会議の席で摂政のアモンツェン化身は李宗哲の職を罷免し、彼の味方をした大施主である河南親王の寺院駐在員を逮捕した。李宗哲は西寧に逃亡し、

馬麒に訴えてで罷免の不当性をならした⁽¹⁾。

馬麒は辛亥革命前後から青海を支配した軍閥である。彼は回民族（漢語系イスラム教徒）で、若いころやはり回民族の馬安良という寧夏の軍閥の部下であった。その後、隊商を組織して商売をやって金をためることに成功し、清末には「西寧分統」という地方政府の軍事指導者の地位につき、その力量を高めた。

11年の辛亥革命のときは国民党を支持し、中華民國の創立に賛成したから、その功績を認められて「西寧鎮總兵」に任命され、西寧地方の実権をにぎった。だが馬一族はたびかさなる戦費をまかなうために重税を課したから青海地方のチベット人、モンゴル人の反抗が各地におこっていた。

こうしたとき馬麒にとってラブラン寺の内紛は絶好の好機であった。彼はこれを口実にいままで自分の管轄下にありながら指一本触れることができなかった独立王国に干渉し、ラブラン寺の実権をにぎり、寺が支配する膨大な富と人民をわがものにしようとする。1917年、馬麒は弟の馬麟に命じてラブラン寺を制圧するための軍事行動をおこさせた。馬麟にひきいられた寧海軍は各地で僧俗チベット人の根強い抵抗を受けながらもラブランに進駐する。18年3月カンジャ（甘加）、サンカ（桑加）、アムチフ（阿木去乎）などの地で激戦がくりかえされたが、けっきょく先込め銃しかもたないラブラン寺がわは敗北した。アモンツェン化身はオーラ（欧拉）という牧畜集落に逃亡して死去する。チベット兵は1000人余りが死んだといわれる。イスラム教徒で構成された寧海軍は仏教に何の価値も認めなかったから、戦闘のたびに各地の末寺を焼き、破壊し、寺の財宝を奪った。

馬麒は一応銓をおさめる代償として、チベット人たちから銀による多額の賠償金を取り立てた。馬麒はゴンタンツェン化身を摂政にし、さらにダジツェン化身をランズオ職に登用したからラブラン寺の実権は李宗哲グループの手に握られた⁽²⁾。

1920年新たにジャムヤン四世の化身すなわち五世がアムドに隣接するカムの理塘で発見された。俗名はダンベイジェンズァン、漢語では黄正光という。1916年旧暦3月の生れである。彼の家はもとと土司の家柄だった。父はゴンボタンジュ（漢語名黄位中）、母はグジョンラツォという。彼は三男で満4歳のときパンチェンラマ九世の占いによって靈童とされた。

息子がジャムヤンの化身とされたとき、父親のゴンボタンジュは、カムまで迎えに行ったデワツァン化身に紛争のさなかにあるアムドのラブラン寺に行く条件をしめした。それは次のようなものであった。

息子は幼いので、かならずゴンボタンジュ一族をあげてラブランに行くのを認めること。その地位についてからは寺院の実権は叔父の黄位吉（漢語名）に掌握させること。ラブラン寺に所属する各集落の首長、民衆は四世に従ったようにわが子にも服従すること。そしてラブランに駐屯している馬麒の寧海軍はかならず撤退すること、などであった。

双方の合意が成立したので、ジャムヤン五世は家族とともに1924年旧暦9月にラブラン寺に到着し、ラブラン寺の領域だけでなく、臨潭、卓尼、青海の同仁などの人々3、4万人の出迎えを受ける。だがゴンボタンジュ一族は、アムドのチベット人たちが回民族に虐げられ迫害されているのに深い衝撃を受けた。

ジャムヤン五世がその地位に座ると家族も仏父、仏母、仏兄などと尊称された。そして否応なしに、寺院内の各種の職権はじょじょにゴンボタンジュとその息子たちの手に移りはじめる。

だが、馬麒の弟の馬麟指揮下の寧海軍は依然としてラブラン地区を占領し続けた。馬麒はラブラン寺の新旧両派の争いを利用し、自分の手の内にある李宗哲一派の力を強化しようとさまざまな策動をする。

これに対しゴンボタンジュはひそかにチベット人同胞を武装させる一方で、自分の腹心のサンムタンを送って、蘭州にいる甘肅省長の陸洪濤にラブランの惨状を訴えた。陸は事件が拡大しふたたび大量の殺しあいになることを恐れ、調停にのりだした。この結果、馬麒には寺から出ていかせることができた。だが、彼の駐屯軍はやはりラブランにいすわりつづけた。5月、パンチェンラマの蘭州訪問を機会に、ゴンボタンジュはジャムヤン五世や一族を連れて蘭州にいき、問題解決のためあれこれ奔走したがなかなか成功しなかった。

馬麒はこれに対抗して、ラブラン寺内部の自分の手のうちにある僧侶に、ゴンボタンジュと長男のロブサンツェワン（漢語名黄正清）の悪業なるものを、「甘辺丁寧海鎮守使署」つまりは自分が支配する役所に訴えさせ、これを口実に六百の騎兵を動員してラブラン寺の審理なるものをおこなった。

彼の一派とみなした僧侶をとらえ、数人の舌を引き抜き、また腕や足を切り落とした。そして寺の壁に張り紙をして、「仏父や仏兄が寺の規則を乱し、政治に干渉し、人民を残酷にあつかったので、法律にしたがって懲罰する」と宣告した。脅しの効果は十分にあった。ゴンボタンジュはこの蛮行をやめさせるために、馬麒に銃六百丁と十万銀元を差し出さなくてはならなかった。

翌年4月、ラブランとその周辺のチベット人僧俗大衆はアムド一円の援助をとりつけ、一万人余りの兵を動員し、馬麒の軍を襲撃した。これに対し、馬歩芳（馬麒の子）は大砲、機関銃を装備した大部隊を動員し、武器の劣るチベット軍を撃破し、寺院30余り、村落百余りを破壊し、掠奪と殺人をほしいままにし、残酷な方法で報復した。ジャムヤン五世一家は卓尼の寺に難を避け、以後各地を転てんとした。

ジャムヤン五世の兄ロブサンツェワンに率いられたアムドのチベット人たちは、しばしば馬歩芳

に率いられた寧海軍にゲリラ戦をいどむ。しかしイスラム教イフワーン派に依拠し河州（臨夏）を掌握して夏河のボトルネックを抑え、優秀な武器をもつ彼等のまえに最終的な勝利をおさめることはできなかった。

ロブサンツェワンと側近のサンムタン、それにチベット人集落の首長の一人である黄祥（漢語名）は蘭州におもむき、国民軍総司令馮玉祥に惨状を訴えてた。馮玉祥は回民族と激しく対立していたから伝統的にこれに対立するチベット人に同情したのであろうか、彼の部下劉郁分は現地調査に宣俠父（秘密共産黨員）を送った。宣はチベット人のおかれた状態を掌握したのち、チベット人に自力で圧政をはねのける重要性を説くとともに、「甘辺藏民泣訴国人書」を起草させ、惨状をひろく訴えて世論の支持を得ようとした。

27年春、国民軍の関係機関は西寧から馬麒、馬步芳の代理人を蘭州により、ラブラン問題の解決交渉に入った。その結果、ラブラン地区は青海の馬一族の管轄から甘肅省の管轄に移すことが決定される。これによって馬麒の軍はラブランを去り、かわって国民軍の保安隊が派遣されことになる。28年青海は甘肅省から分離し、熱河、チャハル、西康などとともに省の制度が施行された。西寧府所属の地域は青海省に編入され、馬麒とその息子の馬步芳の拠点である西寧はその首都となった。

こうして国民政府の斡旋に助けられて、ラブラン寺をはなれていたジャムヤン五世は僧侶と大衆の熱狂的な歓迎のなか、寺に帰還することができた。だが兵火はすぐに止んだのではない。28年ツォンカバ仏殿と二人の化身の住宅となっている寺院が焼かれる。

とはいえラブランには行政機関として当時の近代化の象徴である「設治局」が設置され、国民党の役人がやってきた。まもなく「夏河県」と改称されたこの行政機関は、ラブラン寺の権威がおおよぶ地域をはば網羅し、さらにその周辺地域をつけ

くわえ、もとのラブラン管轄地域よりも大きな区域をもつことになる。ロブサンツェワンは、国民党によって当初「蕃民遊撃隊司令」、のちに「ラブラン保安隊司令」に任命された⁽⁴⁾。

こののち10年の平和の時代が来る。国民党が派遣した県長は実際にはラブランの寺前町の街路を管理するにすぎなくなる。チベット人大衆は国民党になんの権威も認めず、ラブラン寺の伝統的支配に従ったのである。

ロブサンツェワンはこのときラサ政権と連携することを考えなかったのだろうか。彼にもほかのだれか有力なものにも、まったくそのような発想はなかった。アムドの東部と歴史的に深くかわって来たのは北京の政権と漢民族であったし、彼らとの関係こそがこの地の運命を決したという歴史的な経過があった。彼自身にもまた国内外の情勢を見る目がなかったといえるかもしれない。

とはいえ父にかわったロブサンツェワンとその一族が、この地のチベット民族を馬一族の漢人系イスラム教徒の手から救った英雄として尊敬されるのは自然のなりゆきである。国民政府はこの名声を利用してチベット人を治めようとし、ジャムヤン五世を甘肅省政府顧問とし、34年には「輔国闡化禪師嘉木祥呼図克図」という冊印をあたえる。翌年には当時のダライラマ十三世と対立していたパンチェンラマ九世がラブランに来て彼に比丘戒をさずけた。

1935年、36年には共産党指揮下の中国工農紅軍が前後して甘南州の南部を通過するが、ラブラン寺には直接の影響はなかった。

37年、ジャムヤン五世はのちに述べる漢人牙含章をともなってラサに修業に赴く。40年ラブランに帰ると彼は日本の侵略とたたかうために飛行機30機分の資金を国民政府に寄贈し、この業績によって「蒙藏委員会委員」に任命される。そしてイスラム教徒に破壊された印経院、統部上院、ツォンカバ仏殿が再建される。

2 「革命」が来た

1945年8月、中国人民の屍の山と日本人兵士の血の川を残して日本は敗北した。まもなく国民党と中国共産党は戦後の建国方針をめぐる対立し国内戦争に入る。はじめ国民政府軍が優勢にたったが、47年5月人民解放軍が反撃を開始すると国・共の優劣は逆転した。東北華北の漢民族農民は土地改革を積極的にすすめる中共を支持したのである。48年には国府軍は総崩れの様相を見せはじめた。1949年初めには、蔣介石につく正規軍は10万余りとなり、西北から台湾にいたる広い地域にばらばらに在るにすぎなくなる。

49年7月、人民解放軍総司令彭徳懷は、西にすすんで国府軍の残存部隊である胡宗南、馬步芳軍にたいする戦端を開くにいたる。8月王震司令員は第一兵団をひきいて西安から渭河上流にすすみ、甘肅省東南部のおもな都市を制圧した。蘭州が陥落する直前、国民党の甘肅省保安部隊幹部は蘭州を離れて草原にのがれ、現地のチベット人首長らによびかけて抵抗を組織しようとした。だがチベット人指導者のなかには回教徒とともに戦うのを嫌い、これに反発するものあり中立を目指すもので、かならずしもまとまって国府軍の作戦に同調しなかった。このため彼らのおおくは抵抗をあきらめ人民解放軍に降伏するのである。

中共甘肅省指導部は、夏河の指導者ロブサンツェワンの名声と権威からして、彼とラブラン寺にたいする軍事行動は損害が大きくなると判断したのであろう。1949年初めころから中共地下組織「甘肅右工作委员会」（責任者牙含章）は人を派遣してラブラン寺とロブサンツェワンにたいする帰順工作を始めた。地下黨員常英秋に命じ、彼女の夫張子豊（ラブラン保安隊副司令、もと国府軍将校、漢人）を通して、ロブサンツェワンの地位は取り消さないとして彼に希望をあたえ、武装を解除して降伏させる方針を伝えたのである⁽⁵⁾。

ロブサンツェワンは、国府軍の劣勢と、仏教を否定し金持ちを殺すといううわさのある解放軍をおそれ、保安隊を率いて国民党の幹部とともにアムチフの草原集落に逃亡し、各村に遊撃隊を組織するように呼びかけ、また国民党の「甘州西北長官公署」とひきつづき連絡をとっていた。弟のアマンツェン化身も金銀を多くの駄馬に積んで草原に逃げた。

8月、大夏河下流にある回民族の都市臨夏（河州、中国のメッカといわれる回民族の集中地）が中共の手に落ちてから、人民解放軍の王震は偵察のため李福林（もと国府軍将校）と楊貫一（夏河出入りの商人）をラブランに送った。彼らは黄祥（ロブサンツェワンの第二団団長、チベット人）、黄宝元（夏河県政府秘書、チベット人と思われる）等の出迎えを受けた。

この後チベット人は代表を臨夏に送り、解放軍を歓迎する意向を伝える。ついでロブサンツェワンの代理として張子豊、黄立中（副軍官長、チベット人）、俄夏（ラブラン寺代表、チベット人）も臨夏に到着する。この三人はロブサンツェワンから王震あての手紙を持参したもので、どのように夏河を開城するか下相談をしたものと思われる⁽⁶⁾。

ラブラン保安隊の幹部、一般のチベット人のなかには中共黨員かその同調者がいた。副司令の張子豊は国民党のもと軍官で地下黨員であった。またラブランには中共の思想的影響を受けたチベット人が数人いた。伝統的な支配に反感をもち新しい時代がやってくることを期待した「進歩的な」青年である。その青年呉振綱、楊世傑（いずれも漢語名）らは30数人を率いて、国府軍の敗残兵から奪った銃をもち臨夏まで解放軍を迎えにいった。王震は楊世傑らを賞め、呉振綱を荣誉ある共産黨員にした。呉振綱は重慶の蒙藏学院に学んだラブランではかず少ない知識人である。

彼らは、ロブサンツェワン、アマンツェン化身

などが夏河の大衆を搾取している。このため人民解放軍がはやく夏河に来て解放し、人々の「翻身」をたすけてほしいと訴えた、ということである。「翻身」というのは、いままで抑えつけられていたものが起ち上がることである。

これが本当なら、彼らは自らの力でチベット人を組織し、正面から寺院とロブサンツェワン一族の支配と闘うことなく、中共に頼って政変を試みたのである。

ロブサンツェワンが北京の政権が弱体化するのをみても、これを契機にラサのダライラマ政権と結んで独立することを試みなかったように、その支配に反対していた青年らも政治改革にチベット人の主体性がなければ自らの民族の存在が危うくなるとは考えなかった。

一方、側近らの説得に動かされたロブサンツェワンらは中共側に帰順することを承知する。いまや、彼我の力関係は明瞭であった。彼は他の国民党の大物とは違い、台湾に逃れることもしなかった。8月31日、300の保安隊の警衛とともにラブランに戻る。

9月20日に人民解放軍がラブラン「解放」のため到着する。一八九師五五六団（連隊）団長劉光奇に率いられた一営（一個大隊）の軍であった。大夏河を上る途中、かれらは大砲をチベット人の信仰の対象であるアムネマチン（漢語では太子山、黄河源流の同名の山とは異なる）に向けて発射して軍事力を誇示しチベット人を威圧する。

この軍とともにラブランにやってきた中共隴右工作委員会の責任者牙含章（1916～1985）は中共きってのチベット通であった。彼は中学生のとき蘭州で軍閥に反対する運動に参加し追われてラブランに逃げ、そこでチベット語を学びロブサンツェワンの信用を得た。ジャムヤン五世のラサ留学には秘書として同行し、日中戦争の勃発を聞くとやもたてもたまらずカルカッタ回りで帰国。延安の革命根拠地に入った。のちに中国社会科学院民族

研究所長となる人物である⁽⁷⁾。

ラブランに解放軍が進駐したとき、ロブサンツェワン、黄祥、達吉（チベット人）ら上層人士と二万の大衆は夏河の町から1、2キロ下ったところまで解放軍を迎えに出て、敵かな歓迎の、事実上は降伏（中共の歴史用語では「起義」）の儀式をとり行なった。翌日は祝賀大会が開かれる。公式出版物では、チベット人たちは「歌い、踊り、空砲をならして中共万歳を叫んだ」という。

しかしこれがラブラン寺ジャムヤン政権の終わりであった。新しい時代にチベット人は入った。

3 新政権の登場

中国共産党夏河工作委员会がすみやかに組織された。これが権力の中核である。もとの国民党の政府は接収された。保安隊は改組され300人の警衛兵のうち177人が民兵として吸収された。もとの司令部が新夏河民兵司令部とされた。

さて新政権が成立しつつあるとき、チベット人のなかにロブサンツェワンとラブラン寺シャグゾ職アモンツェン化身の罪業を中共当局に書いて差し出したり、街頭にビラを貼るものがあらわれた。もちろん、やらせたものが背後にいた。

これをきっかけに夏河工作委员会の主導のもと大会が開かれ、ロブサンツェワン一族が糾弾され、アモンツェン化身の退陣がもとめられた。おおくのチベット人大衆の前で、チベット人「進歩分子」らがくちぐちに、政教分離、ロブサンツェワン一族の打倒、その財産の全面没収などを要求する演説をおこなった。寺院が地主として、また金貸しとしてもものしていた地代や利息をやすくするための「減租、減息」が主張された。

これを見た中共幹部の印象は、自らの傀儡とでもいうべきチベット人の演説であるにもかかわらず、「チベット人民も自覚が高まった、昔とはかわった」というものであった⁽⁹⁾。

実際に中共夏河委員会が政権を握るためには、

従来の寺院の収税権、警察権などの行政権力を奪う必要がある。そのためには当時寺の実権を握っていたジャムヤン五世の兄弟を追い出して、中共にしたがう僧侶に寺の実権を掌握させなければならない。またロブサンツェワンの軍権と行政権を奪いさり、彼にかわる人間を民兵隊司令とし、県政府の幹部にすえなければならない。

ロブサンツェワンは蘭州に送られ、彭徳懷と面会し、名目だけの甘肅省政府委員、農林庁副庁長という地位につけられる。中国でよくいう「有職無権」というものである。

中共夏河県委員会は進歩分子とみなしたものを新しい県の組織に組込んだ。黄祥は県長になり新民兵隊司令を兼ね、楊世傑は新民兵隊副司令に任命される。ロブサンツェワンをつかんでおくためにその息子を第二副司令とする。いずれも「有職無権」である。

呉振綱には夏河新民主主義青年団をつくる仕事をさせる。この優れた活動家の努力で青年団をつくる仕事は積極的に進められ、半月余りで、50人くらいに成長する。このころアムドの各集落つまり四川、青海、甘肅の省境界地域から200人余りの集落の代表が来て、解放軍に投降する⁽⁸⁾。

いずれは権力の座から追放するにしても、当面は従来の指導者と妥協しながら革命をすすめる。「減租、減息」といった急激な改革路線をとらずゆっくりと前進する、という「統一戦線政策」が牙含章ら中共工作者のがわにはあったものと思われる。だが、実際にはそうではなかった。チベット人大衆の意識の高まりを過信したためか、解放軍の軍事的優位のゆえか、実権が中共指導部にうつると「知識分子」はラブランを引き上げた。

残ったのは数人の陝西省北部の中共解放区からやってきた工作員だった。夏河工作委員会の書記は霍徳義という人でこれが革命政権の実力者だった。副書記も保安対策の担当者もみな古い解放区であった陝西省北部からやってきた共産党員だっ

た。彼らはふるさとは「老紅軍」ではあったが、もともと教育を受けたことのない農民であったとおもわれる。知っていることはただひとつだった。

「陝西省北部でやったことをそのまま夏河でもやること」

それによってロブサンツェワン一族の財産が没収され、特権は剝奪された。ラブラン寺は徴税権を奪われ、また司法警察権もなくなった。アマンツェン化身は寺院内の最高位シャグゾ職の地位から追放された。

宗教を迷信と同一視する教育を受けた漢民族指導者たちは、自分たちの富を搾取している寺院を中心にした精神生活を送る民衆に愚かさを感じたであろう。

霍は「（牙がすすめた）統一戦線政策は寛大すぎると思っていた。わたしは寺の一切の搾取制度に反対だった。歓喜仏など見たくもなかった」といっている。彼は僧侶のなかの漢語ができるものを通訳に採用する時も僧籍から離れさせている。30年後にも、率直に「牙含章は私に相談せずにことを運んだ」と不満をもらしているところを見るとよほど坊主とそれを甘やかす牙が嫌いだったのであろう。彼らはロブサンツェワンと高級僧侶を搾取者として非難し、民衆が寺に布施を送ることも禁止した⁽¹⁰⁾。

中共夏河工作委員会は新政府をおもてに出しながら、「新民主主義革命」にふさわしい政策を、つまりは「解放」をすすめる。ところが実際にラブランでは、「減租・減息」、土地改革（地主制度の廃止）、「反覇」（土地の有力者に対する闘争）などを実施してみても、これが大衆の支持を得られなかった。たとえばワンダタンという集落では、昼間、新政府が土地解放の保証書をチベット人農民に分けあたえても、夜になるとこっそり保証書を返しに来たという。どこの農民も寺院の土地は要らないというのだ。

土地改革は中共の農民にたいする決め手とでも

いうべき政策である。にもかかわらずアムドのチベット人はこれを拒否した。布施も少なくなり徴税権がなくなり地代がなくなった寺院の僧侶はただちに生活苦に陥いる。民衆はこれに同情し新政府への反感を強めていく。これは中共の土地改革工作者にとっては不思議な体験であったにちがいない。

4 占領軍としての解放軍

共産党を代表する立場にあった霍徳義をはじめ陝西省北部の解放区からやってきた幹部たちは、いうまでもなくチベット語を知らなかったから、なにがチベット人のあいだに起こっているか、通訳をとおして知る以外に方法はなかった。いきおい命令だけでことを済ませ、チベット人の気分や要求に耳をかたむけなかった。

彼らは傲慢で享乐的な生活に身をまかせた。霍はじめおおくの幹部が汚職をやるのは普通のことだった。

副県長張月勝は支配下の集落にいて白洋銭20枚程度のブル（チベット織りの衣服）、ジャコウ五つ、狐の皮一枚を受け取った。彼はこれは収賄だとは思わなかった。チベット人の習慣を尊重していると思っていた。しかし彼は夫のいる婦人を横取りしてこれと同棲し、売春宿に出入りしていた。公安局長の張燦厚は鉄砲を横流しし、女を買い、賭博をやり、公費を懐に入れた。税務局副局長何生才は市場の取引税60万元を懐に入れ、女を買った。宣伝部長劉寧は129万元あまりを汚職し銀貨に換え賭博をやり、女を買い、セクトを作って党に対抗した。青年委員会の組織部長房旭明は公安局衛隊長衛高山と結託し鉄砲を横流しし儲けを手にした。

公式文書ではそのほか数十万元、百数十万元という税金を懐に入れたものも何人かいたというが、これは誇張であろう。そんなにこの地方が豊かだったとは現状からは判断できないからである。

チベット人幹部の楊世傑も漢民族幹部にならってチベット人大衆を殴り、白洋銀700元、黄金13.6両を取り上げたりしている。もちろん黄祥も呉振剛も自分がどのようにチベット人に恨まれているか見当がつかなかったに違いない。彼らチベット人新幹部は、民衆にとっては時間があまりたたないうちにチベット人民のがわにたつ指導者とはいえなくなっていたのだ。

陝西西南部から寧夏、甘肅南部にかけては従来ケシの栽培があり、当時阿片は天津におくられ軍閥や日本軍の軍資金になっていた。ケシ栽培はこの地方も例外ではなかった。中共は当然ケシの栽培と阿片の密売を取り締まった。ところが捜索隊の責任者はかつてに密売人を射殺し、押収した銃や弾薬、阿片をとりあげた。また匪賊とされたものをとらえ、上級機関に相談もせず銃殺しあるいは犯罪者とされたものを金をもらって逃がした。寺院や金持ちの家を捜索し、金銀をこっそり自分のものにした。とうぜん新政府の経理も乱脈をきわめた。いや経理の分るものがいなかったかもしれない⁽¹⁾。

5 「反革命」の開始

革命政権が成立しておよそ2ヵ月後に中共黨員のチベット人活動分子呉振綱が白昼殺されたが、犯人が上がらない。仕方なくロブサンツェワンが「命価」を呉の母親に支払ってやった。各地の集落に幹部として派遣されたチベット人工作人員が大衆的な反対にあって追い返される。民兵隊の通訳が殺される。新政府の工作人員にたいする強盗事件が続発する。草原集落アムチフでは反乱がおこる。集落によっては食料の供出に応じない。

ついに楊世傑、黄祥県長など中共のがわにつくチベット人幹部を追放し、ロブサンツェワンをもとの地位にもどし寺の政権を回復するよう公然と要求がでてきた。

50年2月初めの春節に それまでラブランを占

領していた解放軍が引き上げると、ただちに寺の僧侶たちは空に向け銃をはなち、示威行動にでた。この音にたまげた中共書記の霍はチベット人の黄県長をよんできておどした。

「俺にはピストルと手榴弾がある。おまえが寺の坊主をしずめなければ、俺がお前をかたづけるぞ」

チベット人県長は寺に走り、そして銃声はやんだ⁽¹²⁾。

すでに49年10月初め蘭州とラブランとを結ぶ要衝河州、今日の臨夏に反乱がおきていた。イスラム寺院（モスク、宗教指導者の墓と伝道所など）は貧しいものの魂のよりどころであり、そこには仏教寺院同様、富が集まり、土地や家畜、森林があった。中共の土地改革工作員はこれを宗教上層の搾取の結果とみなして土地改革の対象とした。

宗教指導者を反動とし、イスラム寺院に重税をかけ、8戸の金持ちに食料5000石を供出させようとした。また中共型の民兵を組織し、反革命を抑えるために民間の銃を取り上げた。反抗するものに説得ではなく無条件降伏で臨み、捕まえたものに「肉刑」を加えたという。晒しものにしたのか、目をくりぬくとか手足を切り取るというところまでいったのかつまびらかではない。もともと対立感情があるから臨夏では漢回民族間の殺人事件が各所で頻発した。激昂した回民族、東郷民族（イスラム化したモンゴル人）の一般大衆は解放軍に対して反乱を起こした。参加者1万、死傷者1000余といわれ、難民10万、影響をこうむったもの3、40万を出すにいたった大反乱だった⁽¹³⁾。

ラブランの解放軍が移動したのは河州支援のためであっただろう。ラブランと蘭州、臨夏との交通は途絶し、食料も塩もこなくなった。ラブランの新しい支配者たちは羊の肉しか食えなくなった。

アムドでは、河州回民族反乱にひきつづき国府軍の残党や馬歩芳の回教軍の生き残りが最後の抵抗を試みた。彼らは中共の宗教政策と土地改革に

反感をもつチベット、回民族大衆を説得し、この支援を受けながら青海、四川、甘粛の省境地域に陣取ってゲリラ戦を展開した。これは大衆的な支持基盤をもっていたために頑強で、最終的に鎮圧するのは53年の初めのことになった。そのためには30余万のヤクが弾薬や物資を運び、2000頭余りの騎馬部隊が支援し、数百の皮いかだが必要だったというから大規模の抵抗があったに違いない⁽¹⁴⁾。

さて1950年の秋、ようやく中共は方針を改める。漢人幹部のすげかえがおこなわれる。霍徳義は甘粛省当局に呼びつけられる。

霍徳義は述懐する⁽¹⁵⁾。

「誰かが坊主どもを扇動したのだ。

共産党は、信心するもしないも自由だといいながら、イスラム教と仏教を減ぼしている。なぜなら寺の政治と宗教を分離してから和尚たちは民族学院に送られて学習させられている。誰も彼らに金や食べ物を送らなくなったから、寺では飯さえ食えない。

これを上級に訴えた。私を省政府に訴えたので省党委員会の張徳生が私を省に移して調べた。そしてわたしを極左のむてっぽう、統一しようというのに統一しないで戦い、彼らの過ちがないのに闘争を始めたということにした。つまり私を党内警告処分にしたのだ」

彼は地位を失う。だがこの男はやがて名誉を回復して地方の裁判所長などを歴任し、文化大革命で辱められたとはいえ、名士として生涯を終わる。

牙含章の後の思い出ではこうなる⁽¹⁶⁾。

「中共工作委員会は表面だけみてチベット民族の意識水準を高く評価したが、政権の打倒や政教分離は少数の青年の要求に過ぎなかった。ロブサンツェワン一族を打倒したのは早すぎたし、打撃が大きすぎた。かれから軍権を奪い、寺院の徴税権と監獄を取り消したのも、アマンツェンからシャグゾ職を奪ったのもやりすぎだった。旧統治階級

の力をみくびったのも間違いだった。そして霍をはじめ中共党員のやり方に問題があった」

まもなくイスラム教寺院や仏教寺院などに対する「減租・減息」政策をやめ、土地改革は延期された。ラブランでは幹部をアマンツェン化身のところにやって、彼を連れもどす。彼の権威にたよって反乱を抑えようとしたのだ。地代収入の少なくなった寺院にもいくらか経費を補助し、政府との対立を緩和しようとした。とにかく早く夏河県を平穏な状態にしなければならなかった。

52年末、「甘南各族各界連誼会」がラブランで開かれ、各民族間の団結と「土匪」の殲滅がうたわれた。「土匪」とはこの場合革命に反対して武装闘争に入ったものを指す。これを基礎に翌年の正月、ロブサンツェワンを主任委員とする「甘南藏族自治州準備委員会」が発足する。もちろん彼には地位が与えられるが権力は中共が握っている。

さらに53年9月「甘南人民代表会議」が開かれる。集った代表のうちチベット人は60%、漢人は35%だった。10月1日、ロブサンツェワンを自治州人民政府主席に、楊復興（卓尼土司の子、チベット人）、黄祥（チベット人）を副主席に選出し、政治協商委員会主席には朱俠夫（漢人）が座った。すべて「有職無権」ながらもチベット人に気をつかった指導陣がつくられた¹⁶⁾。

6 気の進まない土地改革

この間、農耕地帯では反革命勢力を軍事力でつぶし、その勢いで武力でチベット人を威圧しながら土地改革を進めていく。土地改革こそ中共勝利の最終手段だと考えられていたからだ。土地改革工作者は各集落をまわって土地改革の宣伝をすると同時に商業、医療の活動をし、チベット人を新政府にひきつけようとする。

この土地改革についていま公式には、「少数民族上層の『愛国守法』のものにたいしては闘争を展開せず、反革命分子でない地主にたいしては、

彼らの持っている土地は農民に分配するが、そのほかの財産には手をつけなかった。だが悪質地主や反乱に加担したものには懲罰的に臨んだ。彼らの土地、耕畜、農具、あまっている穀物、家などが、土地のないあるいは少ない貧しいものに分けあたえられた」という。

毛沢東は、土地改革のとき、「過って殺したものはいるか。いる。反革命大粛清の時にやはりいた」とのちに語っている。

そして、51、52、53年で殺された地主は全国で70万になるという¹⁷⁾。毛沢東にとってこれくらいの犠牲は革命の必要事項だとみなされた。

ラブランでどのくらいの人々が反革命悪質地主とされ殺されていったかは分らない。そしてそれがどの程度の冤罪を含んでいたのかも分らない。知っている世代はすでに死につつある。生きているものも決して口に出そうとはしないだろう。

前に見たように仏教寺院やイスラム教寺院にたいする土地改革は一時的に猶予されていた。チベット、回民族の感情を考慮したのであろう。ただ重すぎる地代や、寺がやっている金貸しの高すぎる利息、重税に対して軽減を協議するというやり方で臨んだという。夏河もふくむ甘南藏族自治州の農耕地帯についていえば、1953年に土地改革は終わり、ほぼ全域に自分の土地を持った自営農民が成立する。青海省海北藏族自治州門源自治県では当時2500戸余り、1万8087人の貧雇農がいた。これに6800ヘクタールの土地を分けた。一人あたり0.37ヘクタールである。

チベット人の多くはおしつけられた土地ではあれ、中国共産党によってはじめて自分の土地をもつことができた。地主、反革命分子とされたものへの殺人、投獄をともなったとはいいいながら、これを中共による革命の業績といわなかったらなにがチベット人の「解放」であろうか。

これからわずかの年月が、反革命地主分子としてあつかわれなかった家族にとっては、つかのま

の平穩の時期である。

7 農業の集団化

ここからはラブランとかぎらず、アムド全域に目を転じて見よう。土地改革直後からチベット人が「平原」とよぶ中国内地の農村と同様に、にわかに「互助組」、「初級合作社」（生産共同組合）を組織する政策がすすめられる。互助組は日本の農家についてこの間まであったユイに似ている。経営の主体は個人である。だが合作社は農具も家畜も不十分なもの同士が、20戸から30戸集って、土地、家畜、農具などを供出し共同経営をやるのである。経営の主体は個別の農家から集団にうつり、中共のうえからの指導を受ける。

「チベット人の要求にもとづいて組織がすすんだ」と公式にはいわれている。合作社ははやくも55年から56年にかけて組織され、農家の54%が加入した。この時期の農家はそれでも若干の自留地、自留畜をもつことが許されていた。共同生産のために全財産を供出したのではなく、若干の自己財産をもつことが認められていたのである⁽²⁰⁾。

51年には「三反、五反」があり、商業活動に一定の制限がくわえられたが、その後合作社運動の高まりのなかで手工業、商業の公私合営、つまりは行政による管理が始まった。56年、小市場をまわる小売業者も「合作小組」に組み入れられる。寺院やチベット人の商人がやっていた伝統的な隊商による長距離の交易も、徴税の強化、営業証の発給、資金の登記、工商連合会への参加動員などのなかでやっていけなくなり、公私合営にもっていかれた。公私合営は商品流通が官僚の管理におかれることを意味するから、上からの計画がきめ細かなものでないかぎり、人々はほしいものが手にはいりにくくなるし、売りたいものが売れなくなる。この結果、商品流通はいちじるしく制限され、人々の生活が自給的になり、不便になるのは避けられなかった。

農耕地帯と違って、1956年まで半農半牧地帯と純牧畜地帯は土地改革に匹敵するような中共による「民主化」の波をかぶっていなかった。革命直後の失敗があとをひいたこともあり、寺院や大量の家畜、農地をもつものの特権に手がついていなかったのである。

そこで新政府は、牧畜民の集団化への要求があるからという理由で、まず牧畜地帯の上級人士の座談会などを開いて集団化の準備を始めた。牧畜民の抵抗を権威あるチベット人の力で抑えようとしたのであろう。甘南藏族自治州の政府と政治協商会議委員の合同協議などを経て、夏河、卓尼などで実験的な「互助組」が始まった。この地域では170個の互助組ができた。貧しいもののたすけあい程度のことだから最初はうまくやっていたらしい。

ところが57年の全国的な「反右派闘争」が始まり、「社会主義教育運動」が同時にすすめられた。中共上層はこの直前知識人に自由にものをいわせ中共批判をさせ（「百花斉放」）、そのあと発言したものを右派として弾圧の対象にしたのである。甘肅省全体の反右派闘争では2369人が右派分子として狭辺溝などの農場におくられ、61年前後の飢餓、疾病、過度の労働によって1165人が死んだ⁽²¹⁾。

これは漢民族を含む数字であるというが、少数民族はここに入っていないかも知れない。1989年6月、天安門事件のとき逮捕された労働者農民は裁判らしい裁判を受けることなく簡単に処刑された。階層の下のを人間らしく扱わないのである。これから類推すれば反右派闘争のとき、チベット人にはもっと多くの犠牲者が出ているかもしれない。

反右派闘争といい、社会主義教育運動というのはアムドでは主として宗教、迷信、寺院などのイデオロギーと特権に反対し、階級闘争を宣伝し、「集団化のすばらしさ」を農民に教育する組織する運動であった。しかし現実にはそれは寺を閉鎖

し、僧侶を還俗させ、ひとびとの寺参り、巡礼を迷信として非難糾弾することであった。仏教と限らずイスラム教に対しても中共の攻撃は厳しかった。いずれの寺院も文化と教養のほか、多かれ少なかれ富を蓄積していたから、地主と同一視されることは免れなかった。

階級闘争なるものは人々を「牧主（農業地帯の地主に相当する家畜所有者）、富んだ牧畜民、中位の牧畜民、貧しい牧畜労働者」などに区分し、牧主や富んだひとびとを闘争大会引っ張りだし、吊るし上げることであった。投獄、冤罪などこれからも繰り返される悲劇がおこった。

反右派闘争と社会主義教育運動とは、集団化と結びつけて行なわれた。夏河など半農半牧地域はもちろん牧畜地帯も集団化された。57年草原の多くの集落では初歩的な互助組すら組織していない状態から、いきなり、土地、農具、羊やヤク、馬など家畜を供出して共同生産をやるといわれた。初級合作社（生産協同組合）がまだ組織されないうちに、合作社の集合体である「高級合作社」ができた。のちに合作社は「生産隊」、高級合作社は「生産大隊」とよばれるようになる。卓尼県では58年2月に全県の集団化がおこなわれた。後述するようにラブランすなわち夏河県など半農半牧地帯も基本的には集団化を実現したといわれる。

だが、集団化は現地農牧民の要求ではなかった。それは党の政策にすぎなかった。集団化によって彼らは自分の財産が取り上げられたと考えた。わたしが聞き取りをした初老のチベット人はいった。

「集団化の命令以後、たくさんの宣伝がありました。けれども誰も反対でした」

たとえば青海湖の北の隣接する青海省海北藏族自治州であったことは次のようである。

すでに1955年から合作社は組織された。「農牧地域の合作社運動のなかで、いくらかの地主、牧主は、合作社をやらせまいとして、あるものはわざと耕牛を殺したり、あるものは大量の家畜を屠

殺し、一挙に売りに出すということをやらかした。祁連県黒河源地区の韓世ら3人は2ヵ月に81頭もの羊を殺した。剛察県泉吉地区の牧主はいっぺんに羊200頭余りも売りに出した」⁽²⁾

実際には地主牧主以外の普通の農牧民も大量に家畜を殺して食ったり売ったりしたのである。それはチベット人だけではない。漢人もモンゴル人もウイグル人もみなそういう反対行動にでた。これは今日中共当局も中国の研究者たちも認めていることだ。

8 「反乱」の果て

反乱の気分は社会主義教育運動で十分に醸成されていた。それを起こすきっかけは57年末、58年はじめの人民公社・集団化の強行にはかならない。わたしが92年にラブランで会った四川省阿壩藏族自治州から来たという中年の僧侶は、

「57年、わたしの父は僧侶が寺から追放されるのに反対し、自分の財産が取りあげられて政府のものになってしまうのに反対して、紅原附近の草原で仲間とともに決起しました。2年間解放軍とゲリラ闘争をし59年に捕まりました。鉄砲も古い、食べ物もなかったから仕方ありません。そして獄中で死にました。母と兄は父の罪を問われて逮捕され、20年間『労改』（労働改造所すなわち監獄）に入れられ、79年によりやく釈放されました。わたしはその間、寺を追い出され、うちに戻っていました」

いま政策が変わって、家にはヤクも羊も食べていける程度はいるが、それにしても政府のやり方は酷すぎるではないか、と語った。

西寧近郊の若者が私に語ったことは次のようなものであった。

「甘肅アムチフのゴンパ（寺院）は飛行機の爆撃を受けて全壊しました。決起したラマや一般人が寺に立てこもって抵抗したからです。アムチフやゴラといったところでは男は全部殺されました。

残ったのは女と子供ですから、べつのお寺にいた僧侶が還俗して自分の兄弟の妻と再婚することもありました。兄弟の家族を養うためです。

青海黄南州のノンラ（漢字では尖扎）という県ではチベット人の県長以下全部の成人男子が反乱にたちあがり、ゾン（寺と政庁がいっしょになった砦）を包囲され、みな殺しにされました（この話はノンラではなくべつな県だという人もいます）。中国軍との戦争直後のマチュ（チベット語で黄河）の谷の中腹には切り刻まれた人の頭や内臓がひっかかっていたということです。負けるのが分ると自殺した人もおおく、一家で川に飛込んだ家族もあります。そのときわたしの母は解放軍の水汲みなど雑用につかわれていました。彼女の目の前で人々は川に飛び込みました。解放軍の兵士もあまり悲惨なのにあためて『殺さないから死ぬな』と呼びかけたということです。

彼女は2年くらい解放軍に使われていたのでこれは実際に見た話ですが、わたしは長いことこの話を信じることはできませんでした。解放軍がそんな悪いことをやるはずがないと思っていたのです」

このときのことを公式出版物は次のようにいう。

「1958年春（3月）、まさしく甘南各民族人民が党の指導のもと社会主義の大道を歩んでいるとき、自治州の一部地域に武装反乱が発生した。ごく少数の反動分子が一部の民衆を騙して電信柱を倒し、道路を破壊し、県、郷、政府をとり囲んで攻撃し、現場幹部と民衆を殺し、国家の財産を奪い焼きつくし、草原にはいつとき黒い雲がたちこめ反動的気運が沸上がった。

この反乱は封建的特権と抑圧搾取制度を放棄しようとしなごく少数の反動分子によって、終始人民大衆を敵として引き起こされたものである。彼らは反動的立場を堅持し、党の指導と政策に反対し、社会主義に反対して人民の政権を転覆しようとしたものだ。

社会主義革命と建設事業が深く発展するにしたがい、封建的経済の基礎がまさに崩壊していくのを目のまえにして、彼らは我々の工作のあれこれの極左的な欠陥、錯誤を利用して、政治的意識の低い大衆を欺き扇動、脅迫して公然たる人民の敵となった。（中略）人民の生命と財産が重大な損失を受けるのを見て、各民族人民は強くこの武装反乱を鎮圧するようもとめた。中国人民解放军と各民族民兵は党と人民政府の指導のもと、民族上層人士の積極的援助のもと、政治的闘争を主とし、必要な軍事的打撃を配合して短期間に武装反乱を鎮圧した」²³

青海省黄南藏族自治州でも「58年（たぶん春のこと）、彼らは『民族保護、宗教保護』の旗印のもと、真相が分らない民衆を扇動して自治州の一部に反革命武装反乱を起こした。銀行、商店から強奪し、国家幹部と積極分子を殺害し、民衆を扇動して共同牧場や人民公社から脱退させた。

これに対し自治州の党委員会と政府は『軍事的鎮圧と、政治闘争と大衆の動員を結合する』方針でのぞみ鎮圧闘争を展開した。これを平定するとすぐに農村、牧畜地帯の封建制度を徹底的に排除し、寺院の特権と搾取制度を廃止させた」²⁴

やがてダライ・ラマのインド亡命にいたるこの反乱の規模は小さくなかった。公式的にも「この反乱平定中、おおくの同志が甘南各民族の解放と社会主義の事業に尊い命を捧げた」と記され、戦闘が激しいものであったことを物語っている。反乱はアムド各地で起こっただけではない。カムではすでに55年当時から激しい抵抗運動があった。チベットだけではなく、中国少数民族地域の各所で起きたのである。だが各地の反乱には連携がなく自然発生的なものであった。解放軍の火力のまえには勝利ははじめからありえなかった。

少数の生き残りはラサのがれ、悲劇を伝えた。当時ラサには人民解放軍が駐屯しており、彼らと一般のチベット人との関係はよくなかった。それ

に油を注いだのはカムとアムドから逃げ出したものが伝えたニュースだった。

ダライラマは「自伝」のなかで、56年夏、カムの理塘僧院が爆撃され、父や兄が抵抗運動に参加した家族が残酷な拷問と処刑にさらされ、僧や尼僧が公衆の面前で独身の誓いを破棄させられ、人を殺すことを誓わされたのに怒って、張国華將軍とはげしい論争をしたといっている。張は答えた。

「そのような批判は、チベット人民を保護し、援助しようとする祖国への侮辱である。もし国民のあるものが改革を望まなければ——改革は搾取をなくするがゆえに大衆のためになるはずのものであり——彼らは処罰されるべきである」と。これは当時反乱鎮圧にしたがった漢人指導者に共通の考え方であったろう⁽⁴⁶⁾。

チベット人居住地域で例外なく発生した反乱はアメリカの注目するところとなり、ゲリラ戦争の訓練や武器援助を受けるが、59年3月のダライ・ラマのインド亡命を頂点に衰退に向かう。反乱鎮圧のなかで主な攻撃対象は反乱の中心となった寺院であった。おおくの高級僧侶が逮捕され、銃殺された。ラブラン寺でも主だった僧侶は反乱に加担したものとされ、「平原」におくられ懲役に処せられた。

このときの反乱鎮圧に行過ぎがあったことは複数の出版物が認めている。軍事鎮圧つまりは殺人をやりすぎたこと、また反乱のなかった地方でも事件が捏造されたこと、誤認逮捕、誤審があったこと、また反乱に参加しなかった人を引っ張りだし闘争したこと、でたらめな没収をしたことなどがあげられている。

「しかし『左』の誤った思想があり反封建鎮圧闘争のなかでも過ちを犯した。宗教寺院の封建的特権と搾取制度を廃止したのは正しかったが、それと宗教信仰の問題を区別できず、宗教職業者の正当な宗教活動と金を搾り取る行為とを区別できなかった。同時に人民大衆のなかで有神論を否定

し無神論の大宣伝をやったのは、おおくの信仰深い大衆の感情を傷つけた」⁽⁴⁶⁾

イスラム教をふくめた寺院の閉鎖や宗教指導者の逮捕、投獄、僧侶の強制的な還俗がおこなわれた。そして現地人幹部、一般大衆にも無実の罪を着せていき、それが作物の種まきを遅らせ、出産期の家畜飼育を混乱させ、これが1年後の凶作の原因のひとつとなった。

ラブラン寺は57年以前には、3800人の僧侶がいた。そのうちラマ（修業後教師資格をもつ僧侶）は500、高僧の化身ラマは60であった。58年6月、工作団がラブラン寺に進駐し、僧侶に無理やり「昔はこんなに苦しかった。今はこんなに幸せだ」といわせる「訴苦運動」をやらせた。それは苦しみを思いだして泣く、という儀式をとまっていた。泣くまでその人を壇上から下ろさないのだ。

9月、反封建闘争と称して寺の行政組織を「改革」した。この間、僧坊の破壊は進んだ。多くの僧侶が強制労働と「改造」すなわち棄教を迫られ、寺から追い出された。僧侶は400に減少した。巡礼はおろか参拝も許されない。58年の反乱鎮圧によって甘粛省だけで369の仏教寺院のうち、361ヵ所が閉鎖、残されたのはたった八ヵ所にすぎない。これはイスラム教寺院でも同様の事情だった⁽⁴⁷⁾。

生じた冤罪、つまり誤認誤審による投獄と殺害、寺院の閉鎖、僧侶の追放といった問題については、60年代初めに一定の罪の取消や身分保証、逮捕者の釈放がおこなわれた。だがこれは徹底したものではなかったので完全な回復には1979年以後の宗教自由化の政策まで待たなければならなかった。だからこの時期「反革命」とされ投獄されたもののなかには、80年代初めにようやく釈放されたものもある。殺された人がどのくらいいたか今でもよく分らない。

58年の後半、チベット人は自民族のなかで権威のある人、英雄といってもいい人、遠慮していても好人（漢語では「好漢」）というほかはな

いひとびとの批判闘争大会に参加させられた。それらのひとびとは反革命分子として大勢のチベット人のなかを引き回され、まわりのチベット人は彼らを殴らされた。殴らなければ自分が犯罪者あつかいを受けなければならなかった。

行政幹部の中でもチベット人の数は急速に減った。

9 飢えが来た

反乱鎮圧の軍事力、破壊力による威圧のなか、58年9月、甘南自治州は甘肅省全体にさきがけて全「人民公社」化が実現した。人民公社はパリ・コンミューンのあのコンミューンのことだ。

あるところでは初級合作社（のちに生産隊）ができて1年しかたたないうちに高級合作社（のちに生産大隊）を作り、あるところでは初級合作社を作っているさいちゅうに高級合作社にさせられた。おおくの地方では互助組がまだ成立しないうちに高級合作社に組込まれた。州全体で47の公社ができた。そのうち36は1ヵ月以内にできたばかりの655の高級合作社をかきあつめたもので、11はついこの間までは個人経営の牧畜民を組織したものであった。20弱の高級合作社でひとつの公社をつくったのだからひとつの公社には少なくとも400戸が加入していたのである⁽²⁾。

人民公社では、ひとびとは土地や家畜、農具を供出させられただけではない。合作社をやっていたところにわずかにあった自留地も自留畜も取り上げられた。食料は公社から現物支給され、あるところでは集団食堂がひらかれ、家庭で炊事することが許されない。それにともなって鍋や包丁が持ち去られる。副業も奪われる。もっとも貧しい人の仕事であった牛糞をひろって売ることすら許されない。

仏教寺院の宗教活動はいちじるしく制限された。寺への参拝、読経も許されない。ラブラン寺の僧侶は400人に減少したという。ましてラブランか

ラサへいくことはおろか、青海のクムブム寺への巡礼も認められない。

ところで公社の経営は、上級の黨員といえどもまったく経験がない。大きすぎて作業の配分だの道具の手配だのどうやるのか分らない。仕方なく上から幹部に任命された現地のチベット人が目見当でやる。収獲物の分配はあたま割りで機械的に平等にやる。仕事がうまくいくかどうか分らない。これが「社会主義集団化」の完成とよばれたものである。公社の幹部は自分の成績を上げるために、集団化によって自分の人民公社が豊作豊収を実現したという報告を上げつづけた。増産できるとなると上級機関は供出割り当ての額をおおくする。架空の増産報告によって、政府に供出上納すべき穀物や羊毛、家畜、バター、チーズの量は増えていき、農民と牧畜民の手には自分のうちで食べていけるだけの収獲物すら分配されなくなる。

しかも人民公社は自給自足的な経営をめざした。「以農為綱」という。穀物栽培農業が本筋だというわけだ。牧畜民が穀物をほかから買入れ入ることは許されない。そこで自給しなければならない。開拓が強制される。農耕民族である漢人の指導者は、牧畜を「水草をもとめてさまよう」おくれた生産様式だと思っている。これは90年代の現在でもあまり変らない。そこで彼らは草原を耕して畑にさせるのがチベット人のためには進歩だと考える。「大躍進」期にはこの傾向はいっそう拍車をかけ、蛮行というにふさわしいものになった。

このとき荒れ地を開墾したといわれるが、そういうことはありえない。新しい畑は、荒れ地ではなく草がよくできる冬春用の牧野を開拓する以外に方法がない。そして中国の法律では草原や砂漠は元来無主地であるから開拓をすればその集団の占有地になる。もっとも良好な牧野を奪われたチベット人の家畜は、冬と春、大量に餓死した。しかもアムドの大部分の地域は標高3000mをこえ、乾燥がいちじるしく、耕作限界をこえた新開墾地

の畑からはほとんど収穫がない。放置された畑は砂漠化し、草は生えない。

公式の出版物でも、甘南藏族自治州の1962年の食料総生産高は57年のレベルよりは30%減少して4万5311トンとなったとしている。海北藏族自治州でも、1960年の食料のヘクタールあたり収量は540kgでしかなく、これは49年の収量よりも82.5kgも減少している。アブラナにいたっては22.5kgの収穫しかなかった。59, 60, 61年とすさまじい飢饉が続いたことをものがたる数字である⁽²⁴⁾。

飢饉は58年の冬から本格的になった。人は働こうにも腹が減って動けなくなっていく。人はたちまち木の葉や皮、草など家畜と同じ食べ物を食うようになる。草原の食える草とその根は掘りつくされた。人民公社に供出された家畜がこっそり殺された。ふだんは絶対に食べない馬の肉すらごちそうに加えられた。どろぼうは日常茶飯事になった。まず老人が弱っていき、やがて死んだ。赤ん坊は生れなくなった。生れたとしてもすぐに死んだ。そして壮年のものも死にだした。

10 漢民族移民と逃亡

ひるがえって、この事実を漢民族移住者の立場から見てみよう。1949年の革命後の混乱と朝鮮戦争のあとしまつが終わると漢民族の少数民族地域への集団移住が始まった⁽²⁵⁾。

1956年、青海省行政当局は、食料生産の大基地にする、というふれこみで内地から青海への大量の移民が必要だとして、山東、河南、河北、安徽、北京、天津などから第一次移民として6万9000余人を受け入れた。

彼らは家族全体が移民するかたちで、おもに農業地帯の比較的耕地の多い合作社に分配され開墾にしたがった。国家は多くの移民に一時生活費を支給したが、けっきょく青海の高地気候に「平原」の農業は適応できなかった。

しかも異民族のおおい現地風の生産と生活にな

じめず、現地民と衝突した。たとえば化隆回族自治州に入った移民は宗教も習慣もことなり現地人から孤立した。半年あまりで多くのひとは農業を捨ててふるさとにこっそり帰りだした。58年「大躍進」のとき第一次移民はほとんど逃げてしまった。

第二次移民はこれよりもひどかった。第二次は人民公社が青海でつくられてから少しあとの59年から60年にかけておこなわれた。飢饉のときだ。

「青海省を祖国の重要な食料基地にする」という号令がうえの方からあり、そのもとで全省で開墾をする決定をした。河南省から9万8000人の青年を青年突撃隊の名前でつれて来た。うち8万人は全省6つの自治州の新しくつくった青年農場に配分した。当時は困難を克服するのに意識の改革をもってする精神主義が横行し、組織管理と生活への配慮がなく、計画も応援体制もなかったから、食料がいきわたらず生活が苦しく、逃亡と死亡が大量に生れたのは当然のことであった。

ひとによっては字があまりよく分らないものもいた。「平原」の女性にとって現地の比較的自由な性関係は耐えられないものにうつった。労働力である青年自身がそもそも食っていくことができず、しかも反乱など社会的混乱もあって大部分が逃げてしまった。

彼らが農場から逃げだしたとき、当局は鉄道の駅や道路で待ちかまえてつかまえ、運転手に移民を乗せないように命令した。開拓者はもはや囚人にひとしかった。仕方なくあるものは二郎山の要衝を越えて青海を逃げ出した。

ついでにいうと第三次移民は65年で、山東省の都市知識青年を9000人つれてきて、海西蒙古族藏族自治州ゴルムドのもともといい条件の農場を知識青年農場として建設した。だが、「文革」の10年の動乱のなかで逃げ始め、84年には4000人しか残らず、のちに国务院の許しを得て多くの青年が山東に帰り、85年末に残ったものは500人余りであっ

た。

青海の3回にわたる集団移民は中国内地の7つの省と市の17.5万人におよんでいる。彼らの末路は、ほとんどが飢え死にか逃亡であって、成功した例は報告されていない。生き残ったものは文化大革命の終了後、代表を北京に送り、中央政府に惨状を訴えたことで知られる。

11 消える民族

もとに戻って、こうした悲劇を聞き取りと資料によって移民に入りこまれた現地牧畜民のがわからせてみよう。青海の「開荒」によって牧民の牧草地は40万ヘクタールちかくが破壊され、1957年に1500万頭いた家畜は60年には900万頭に減少し、8年まえの52年の水準に後退した。

ゴロク（果洛）藏族自治州は全人口の90%ちかく、玉樹藏族自治州は100%ちかく、黄南藏族自治州は65%をチベット民族がしめている。ゴロク州は52年に各種家畜が150万頭くらいいたが59年には100万頭に減ってしまった。1964年の第2回全国人口調査によると、ゴロク州は53年の10万人から5万6000人に減少していた。玉樹州は53年の12万6000人から64年には10万2000人に減少していた。黄南州は53年の8万1000人から7万9000人に減少していた。

数字はいずれも漢人、カザフ人、モンゴル人をふくむ人口の総数をしめしている。だがチベット人の純居住地帯というにふさわしい地域だから、減少人口の大半はチベット人である。

調査年の64年は大躍進の最悪の時期からやや時間がたっている。食料がおおくなりはじめ、子供が育つようになってから少なくとも2年はたっている。死者と逃亡者の数は単純な引き算よりは遙かにおおいと考えられる。

たとえばゴロク州は44%の減少ではあるが、50%を越す人びとが死んだのではないだろうか。玉樹州は2万4000人の減少だが、飢餓の時期は3万

以上が死んだのではないか。黄南州は2000人弱の減少だが、それ以上が死んだのではないか。

この人口減少の背景にはもちろん大躍進、「土地集団化」に重なる反乱とその鎮圧のための戦争による死者がある。だがそれだけで、人口が半分ちかくも減少するといった恐ろしいことはありえない。このとき「平原」でもひどい飢餓があった。そのため子供も育たない地域は中国東部沿岸の穀倉地帯にもでていた。しかし、このように激減する地域はそうおおくはない。このときの餓死者は中国全土で1600万人といわれている。日中戦争の犠牲者と同じくらいかも知れない。いやそれよりも多いかも知れない。

青海の漢人入植地域では「大躍進」による生産の混乱とそれによる凶作、強制的な草地開墾、それに漢人移民による草地開墾がつけ加わって家畜が大量に斃死したことが人口減少の原因である。59年の家畜の減少は人口の減少に密接に関連している。

61年からパンチェン・ラマはアムドを視察し、その惨状に大きな衝撃を受けた。かれは62年5月、「チベット全体の状況と具体的状況、およびチベットを主とするチベット民族各地区の甘苦と今後の希望要求に関する報告」（のちに「七万言書」とよばれる）なる意見書を国务院に提出し、系統的に率直に中共のチベットとチベット人政策に対して批判を加えたという。もともと親中共的と見られ、59年の「反乱」にも（本心か否かは分らないが）反対声明をだしている人物であるが、個人的には直情径行の人であったようだ。

62年の「廬山会議」からふたたび毛沢東主義が協調されると、この意見書によってかれは反動あつかいされ、64年9月にはチベット自治区準備委員会はパンチェン・ラマを名指しで批判して失脚に追込んだ。その後彼は「右派分子」とされて監禁生活に追込まれ、さらには文化大革命の期間は投獄され十数年を獄中で過ごした。

(ラブランの歴史についての若干のメモ)

ラブラン寺の始まり

アムドには権威のある寺院はふたつあって、ひとつは西寧盆地にあるクムブム寺（漢人は搭爾寺という）で、もうひとつはラブラン寺だ。1949年の社会主義革命以前は、ラブラン寺は、現在の甘肅省甘南藏族自治州北部をひろく支配していた。日本でも東大寺や興福寺がそうであったように、この寺も寺の経営に必要な領地をもっていたのだ。

チベット青海高原の東部は紀元前の秦漢帝国時代から紀元2世紀にかけては西羌の地であり、7世紀にはチベット民族の吐蕃王国の支配するところであった。そののち漢民族の宋やタングート民族の西夏に支配された。

チンギス汗がモンゴルの大帝国を建ててからは、いうまでもなくモンゴル民族の支配下にあった。元朝は少数民族をその伝統的な指導者を通じて支配するという、いわゆる「土司」の制度をアムドのいくつかの地方においた。明朝はそれを継承し、カムのチベット人を西康人とよび、アムドのそれを蕃族とよんでいた。河州いまの臨夏（地図参照）にチベット民族対策の軍屯田兵の役所として「河州衛」をおいていた。このアムド地方に茶をのむ習慣が普及すると茶馬貿易がさかんになり、一帯に茶が輸入され、良馬の輸出義務が課せられたこともあった。

明朝の力が衰えるとチンギス汗の末裔であるグシ汗が率いるモンゴルのホショト部がチベット青海高原一帯を制圧し、ラサを中心とするチベット中央部にも影響力をもつようになった。彼の一族は満州民族のつくった清帝国からは親王、郡王、貝勒、貝子、公などの爵位を受けてかたちのうえで清帝国皇帝に服属する一方、チベット高原では多数民族のチベット人を支配したのであった。

17世紀末、青海の支配者ホショトモンゴルの親

王ロザン・テンジン（ロブサンダンジン）はその父の時代から有力で、彼の代になるとほかのモンゴル部族を従え、青海高原の覇権を握った。当時もそして現在も、チベット仏教のもっとも有力な宗派でダライラマを頂点とするゲールク派は、ロンブク寺をはじめ青海各地に寺院をもち人々の信仰を集めていたから、彼はこの支持を取りつけて自分の政治的な力を拡大したのである。

一方、南にはやはりグシ汗の子孫であるツァハン・テンジン（ツァハندانジン）があり、力は劣るとはいえ名家であった。彼は清朝の勢力を背景にロザン・テンジンに対抗しようとしたが、もちろんそれだけでは不十分で、どうしても民衆の支持が大きいゲールク派の有力な寺院が必要であった。しかしすでにアムドの寺のおおくがライバルの支持にまわっていた。彼は自力で大寺院を建てる決意をした。

それにはラサの仏教界にも知られた有徳の僧侶が創始者となる必要があった。そこでツァハン・テンジンは、アムド出身でラサで修業しすでに中央チベットですぐれた宗教上政治上の手腕を発揮していたジャムヤン・シェペー・ドルジェ（1648～1721）を招いた。

1709年、大夏河（サンチュ）上流の小盆地ザンチに、まずはヤクのテント張りの寺が創建された。ザンチは牧畜民と農耕民が生産した物資を交易をする市場がたつ場所であった。

翌年トゥーサムリン学堂が建設された。聞思学院の意味である。16年にはグューメーパ学堂が建設された。統部学院である。

ツァハンは自分の支配する牧畜民500戸を寄進して大施主となり、彼にしたがうモンゴルの貴族エルドニ台吉（王）もこれにならって薩爾地方を献じた。

もともとジャムヤンは高名な哲学僧であり、政治家であった。そのうえラサのダライラマから封号を下賜されたこともあり、施主のツァハンがダ

ライラマ六世擁立に功績があって清朝からホショト駐前首旗蒙古黄河南親王（河南親王）に任じられたということもあって、ラブラン寺の権威は急速に高まった。

またライバルのロザンが清朝にたいする独立反乱を組織したとき（1723年）、青海のロンブク寺や郭隆寺、郭莽寺などはこれに同調した。が、ツァハンはこれに反対し清朝側にたち、ラブラン寺も行動をともにしたので、反乱鎮圧後、他の寺が破壊され、その後も清朝によって活動を制限されたのとは対照に、その権威はますます高くなった。

この反乱について、今日中国の出版物はロザン・テンジンを祖国を分裂させるものとして非難し、ツァハンの清朝への追従を支持している。満州民族の帝国にたいする反乱を現代中国が非難するのは奇異に感じるかも知れないが、このことは中共の没歴史的な（非マルクス主義的といってもいい）独特の民族理論ないしは歴史観によって導き出されたものである。

この反乱の後青海地方には内モンゴルと同様の「旗制」がしかれ、清朝の直接支配が強まる。

さてジャムヤン一世がチベットから帰ったとき18人の弟子も同行した。彼はその弟子のうちもっともすぐれた2人に寺の教務と事務を受け持たせた。また食堂や日常の雑務を分担するものを定めて組織のひな形をつくった。

ジャムヤン二世クンチョク・ジグメーワンポはラサでゲシェ（博士）の学位を取得すると、ラブランに帰り、東モンゴル、アムド、カムを布教してまわり、またドゥンコル学堂すなわち密教を教える時輪学院、メンパ学堂すなわち医学を教える医学院を建てて、ラブラン寺を拡張するとともに、おおくの末寺を建てて勢力を拡大したから、乾隆末年にはカム、アムドでもっとも影響力のある寺となった。入門者もあいつぎその宿舍である僧坊も寺の東側に増築されていった。

彼は行政手腕に長けた人であつたらしく、ジャ

ムヤン本人とラブラン寺そのものの管理に関する組織と、教学や末寺や領土などを含めた全寺の宗教、財政を支配し、監獄をも併設する行政組織をつくった。

後継者たちも寺領の拡大と僧侶の増大にともなうて、行政と教学の制度と役職を拡充した。これとは逆に寺院の大施主であるモンゴルの黄河南親王家は経済的政治的力量を失っていくのである。

革命直前のラブラン寺

1940年代にいたっても、ラブラン寺の六大学院をはじめ、数十人いる高僧の転生者（化身、漢語では活佛）とその末寺、所領の最高指導者はジャムヤンの歴代転世者であることはいうまでもない。しかし五世は40年ラサ留学から帰国すると彼の権限が形式的なものになっていることを知って、改革を決意し、自らが指導するイツァン機関を作った。この機関はシャグゾ（香佐）職が主催し、イツァンダンプ、司食長、司服装長、経務長、秘書長等等、寺院の幹部で構成する会議で、本山、末寺、寺領の行政軍事の一切の権限をもつ。それは従来の御前会議と教務会議に代るもので、一切の案件はジャムヤンの決済を経なければならず、権力は彼個人に集中した。とはいえ彼一人で全てを決済することは不可能だ。そこで従来からジャムヤンに次ぐ地位にあったシャグゾ職と権限を分担した。ジャムヤンは寺院内部の事務一切を、シャグゾは末寺と所領の行政を行うことにした。

彼は数十人もいる各種の転世者（化身、漢語では活佛）、僧侶のなかからシャグゾ職を任命した。ジャムヤンが大統領とすれば彼は総理大臣である。事實はラブラン寺の大活佛の一人で、腹違いの次兄がシャグゾ職に就任した。この人ははや死にをし弟がシャグゾ職をついだ。ジャムヤン五世の長兄は国民政府機関の保安隊司令、シャグゾ職を襲った弟は馬歩芳に追放され草原で死んだラブラン寺の高位のアマンツァン化身の転生者であつた。と

いうわけだから、改革はジャムヤン一族の支配構造をつくるためであったかもしれない。

45年、日本が敗退すると、時代の変化を感じとったラブラン寺は近代化に着手する。夏河県にも臨時参議会が組織され、アモンツェン化身は議長となる。46年には青年ラマ職業学校ができる。ところがジャムヤン五世は天然痘のため32歳の若さで、47年に逝去する。

〔注〕

- (1) 『甘南藏族自治州概況』甘肅民族出版社
1986年（以下①と略称） P59
- (2) ①P60
- (3) ①P60および『夏河県党史資料』第一集 中共夏河県党史資料征集弁公室1991年9月（以下③）と略称）
- (4) ①P61
- (5) ③牙含章，張元清
- (6) ①P81および③『夏河県党史資料』第一集 霍德義口述，『甘肅抗戰史略』甘肅人民出版社 1988年（以下⑥と略称） P116, 117
- (7) ③張元清
- (8) ③張慶有
- (9) ③張慶有，牙含章
- (10) (9)に同じ
- (11) (9)に同じ
- (12) ③霍德義
- (13) ⑥P123
- (14) ①P85
- (15) ③霍德義
- (16) ③牙含章
- (17) ①P91
- (18) 『中国語』1993年11月，釜屋修論文
- (19) 『海北藏族自治州概況』青海人民出版社
1984年（以下⑩と略称） P38
- (20) ①P109
- (21) ⑥P169
- (22) ⑩P167
- (23) ①P113
- (24) 『黄南藏族自治州概況』青海人民出版社
1984年 P66
- (25) 『ダライ・ラマ自伝』文芸春秋 1992年
P140
- (26) ①P114
- (27) ⑥P174
- (28) ①P112
- (29) ①P167, ⑩P81
- (30) 『社会学研究』一九八八年四期 原華榮論文